Long-range potential を持つ Schrödinger 作用素の散乱理論(修正波動作用素の完全性)

厚生省 北田 均

本稿の目的は long-range potentialを持つ Schrödinger 作用素に関する散乱理論を展開することにある。特に time - dependent wave operator の完全性の証明に重点をおいて述べる。我もの方法を使えば、Pinchuk 氏 [10]、礎崎洋氏[4]によって構成された etationary mare operator と time - dependent mare operator と o 関係をつけることもできるが今回は省略する。詳細は[7]、[8] を窓照されたい。また証明は概略を述べるにとどめる。これも詳細は前記論文を参照されたい。

乡1. 主結果,

H1, H2 をHilbert空間 光= L²(RN), N≥1, にあける次のような Schrödinger 作用素とする。

(1.1)
$$\begin{cases} H_1 = -\Delta = -\frac{N}{J-1} \frac{\partial^2}{\partial x_{J_1}^2}, \\ H_2 = H_1 + U. \end{cases}$$

ここで、 H_1 は $-\Delta$ $C_o^\infty(\mathbb{R}^N)$ の 光に あける 自己 共役 拡張 を 表わ

す、また、ひは次の仮定をみたす potential とする.

仮定 1.1. ひは $U=V+V_S$ と分解され、V 、 V_S はそれぞれ以下の条件(L)、(S) をみたす R^N 上の実数値可測関数 V 、 V_S による $H=L^2(R^N)$ にあける極大計算作用素である。

- (L) Vは RN上の 実数値 C[®]関数で、
- $(1,2) \qquad |\Im_{x}^{\alpha} V(x)| \leq C (1+|x|)^{-|\alpha|-\varepsilon_{0}}$

を $\bowtie \leq K$ 。 なる任意の外重指数 $\bowtie C$ なしてみたす、但し、 $0<\mathcal{E}_0<1$,0<0、 $K_0\geq 4$ とする、また、 $\partial_{\mathcal{I}}=(\partial/\partial X_1,...,\partial/\partial X_N)$.

- (S) VsはRN上の実数値可測関数で,
- $(1.3) |V_{S}(x)| \leq C (1+|x|)^{-1-\epsilon_{o}}$

をみたす. 但し, С, ε。は (山に同じ.

この仮定のもとに、H2は北にあける自己共役作用素となり、 $\mathcal{D}(H_2) = \mathcal{D}(H_1) = H^2(R^N)$ である。但し、 $H^2(R^N)$ は2階の S ebolev 空間を、また $\mathcal{D}(T)$ は作用素下の定義域を表わす、

我をの主結果を定式化するために、Hirmander [1]による 結果を述べておく。

東理1.2. 仮定1.1 のもとに $R^N \times R^1$ 上の実数値 C^∞ 関数 $X(\xi,t)$ が存在して, R^N -1のの任意の compact 集合S に なし, 次の三条件をみたす。

- り 任意のる ∈ RNに対し, X(美,0)=0.
- 们 おる正数Tかあって,任意の $\S \in R^N$,HI>T なるせに

対し、

- (1,4) $(\partial_t X)(\xi,t) = V(2t\xi + (\partial_{\xi} X)(\xi,t))$.
- 但し、ひゃヨクカナ、コミ=(2/2至1,…,2/2至N).
- 们)任意 $0< E_1 < E_0$ 友る E_1 に対し,ある正数 C があって,任意の $S \in \Omega$, $t \in R^1$,及心, $|\alpha| \leq K_0-1$ 友る n 重指数 $|\alpha|$ なし,
- (1.5) |(みx)(x,t)| < C (1+1+1)¹⁻¹かがり立つ。

この定理から数学的帰納法により、次の系が容易に導かれる。

- 系1.3. 仮定1.1 のもとに、定理1.2 の $X(\xi,t)$ は次をみたす: R^N-10 の任意の Compact 集合 Ω と $O<\epsilon_1<\epsilon_0$ なる ϵ_1 になし、する正数 ϵ_1 があって、
- (1,6) $|(\mathcal{X} \partial_{\xi}^{g} X)(\xi,t)| \leq C(HHI)^{1-|\alpha|-\epsilon_{1}}$, $\xi \in \Omega$, $t \in R^{1}$ が $|\alpha|+|\beta| \leq K_{o}-1$ なる任意の1次元,及心,N次元外重指数 d , β に対して成り立つ、特に, $\alpha \neq 0$ のときは,(1,6) は $\epsilon_{1}=\epsilon_{o}$ として成り立つ。

さて, 多をL'(RN)におけるFourier変換とする:

$$(\Im u)(\xi) = \mathcal{U}(\xi) \equiv (2\pi)^{N/2} | \lim_{M \to \infty} \int e^{\iota'(\chi,\xi)} u(\chi) d\chi, u \in L^2(\mathbb{R}^N).$$

定義1.4. 任意のせ←R1に対し,

(1.7)
$$X(t) = \mathcal{F}^{T}[X(\S,t)]\mathcal{F}.$$

X(t)は明らかに光にあけるH₁と可換な自己共役作用裏を定義する。主結果を述べよう。

定理 1.5 (修正波動作用素の完全小生)。 仮定 1.1 か $K_0 = [(N+7)/\epsilon_0]$ としてみたまれるとする([]は Gause 記号)。この時、強極限

か存在し、W吉は始集合 $\mathcal{H}_{1,ac}=\mathcal{H}$ 、終集合 $\mathcal{H}_{2,ac}$ なる $\mathcal{H}_{1,ac}$ は $\mathcal{H}_{3,ac}$ は \mathcal{H}_{3,a

が成り丘つ、ここで、FyはHy に随伴するスペクトル測度を表わす。

次に Invariance principle を述べるために,若干の準備をする. アを下 $C(o,\infty)$ なる有界 Borel 集合とし, I を (o,∞) 内の開及間で下C I なるものとする。 $g \in C^\infty(I)$ を更数値関数とし, $\eta \in C^\infty(R^1)$ を $\eta(A)=1$, $\lambda \in \Gamma$,

(1.10)
$$ag(t,r) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \eta(\lambda) e^{-ity(\lambda) + itr\lambda} d\lambda$$

とかくと、任意のteric対し、 $ag(t,\cdot) \in L^1(R^1)$. 從って、

net, t ∈ R1になし,

(1.11) $Q_g(t) u = \int_{-\infty}^{\infty} Q_g(t,r) e^{-irH_1-iX(r)} u dr$ が定義でき、 $Q_g(t) \in B(H)$ となる。但し、B(H) は代にあける有界作用某全体のなす B anach を 間 を 表かす。 せて、 Imanânce principle を定式化しよう。

(1.13) $W_{9}^{\pm}(P) = W_{5}^{\pm}E_{1,ac}(P)$

が成り立つ、ここで、 Fjac は Fjの発対連続部分を表わす。 82、 固有関数展開。

本部では前節で導入した Schrödinga作用素 H1, H2 ト関する 固有関数展開について述べる. 本部の結果は後節で定理1.5, 1.6 の証明の際に用いるれる.

定義2.1. Y>0, $\omega \in \mathbb{R}^N$, $\lambda \in \mathbb{R}^1$, $\S \in \mathbb{R}^N$, $t \in \mathbb{R}^1$ に対 U, (2.1) $f(\Upsilon, \omega, \lambda) \S, t) = \langle \omega, \S \rangle + t(\lambda - |\S|^2) - X(\S, \Upsilon t)/\Upsilon$ とおく、但 U, X は定理 1, 2 で定義 t れた C^∞ 関数である、このと t 、次の命題が成り立つ。

命題2.2、仮定1.1 かK=4としてみたされるとする。K

∂ 任意のY>R, Aw, (ω,λ) E J に対し,

(2.2)
$$\begin{cases} (\partial_{\xi}f)(r,\omega,\lambda), \xi = (r,\omega,\lambda), t = (r,\omega,\lambda) \\ (\partial_{t}f)(r,\omega,\lambda), \xi = (r,\omega,\lambda), t = (r,\omega,\lambda) \end{cases} = 0.$$

- ii) $O< E_1 < E_0$ なる任意の E_1 に対し、正定数 C がずって、任意のY>R, $(\omega,\lambda)\in U$ に対し、
- (2,3) |(§を(Y,w,x),tを(Y,w,x))ー(土($\sqrt{2}$)| $\sqrt{2}$)| $\sqrt{2}$ か成り立っ。
 - iii) 任意のY>R,(ω,λ) ∈ ひになし、行列 す(Υ,ω,λ) ξき(Υ,ω,λ), せき(Υ,ω,λ))

$$=\begin{pmatrix} \partial_{\xi}^{2} & \partial_{\xi} \partial_{t} \\ \partial_{t} \partial_{\xi} & \partial_{t}^{2} \end{pmatrix} (\gamma, w, \lambda) \xi^{\pm}(\gamma, w, \lambda), t^{\pm}(\gamma, w, \lambda))$$

は正則である.

証明. ルモル>1/8。ととり,

$$g(g,w,\lambda)\xi,t) = \begin{cases} (\partial_{\xi}f)(g^{-M},w,\lambda)\xi,t) &: g>0, \\ w-2t\xi &: g\leq0, \end{cases}$$

$$\lambda(g,w,\lambda)\xi,t) = \begin{cases} (\partial_{\xi}f)(g^{-M},w,\lambda)\xi,t) &: g>0, \\ \lambda-|\xi|^{2} &: g\leq0 \end{cases}$$

と関数 (g, fl): R1xRNxR1xRNxR1→ RN+1 き定義すると、こ

$$\det \begin{pmatrix} \partial_{\xi} g & \partial_{t} g \\ \partial_{\xi} h & \partial_{t} h \end{pmatrix} = 2^{N+1} (-1)^{N} |\xi|^{2} t^{N-1},$$

及びり

$$\begin{cases} g(0,w,\lambda) \pm \sqrt{\lambda}w, \pm 1/2\sqrt{\lambda} = 0, \\ h(0,w,\lambda) \pm \sqrt{\lambda}w, \pm 1/2\sqrt{\lambda} = 0 \end{cases}$$

ゆえ,陰関数定理,及心, SN-1XKのcompact 性を用りて, C1関数 (デナ、そ): (-90,90) XU-> RN+1 z",

$$\int g(g,w,\lambda) \, \xi = (g,w,\lambda), \, \xi = (g,w,\lambda) = 0, \\
 (h(g,w,\lambda) \, \xi = (g,w,\lambda), \, \xi = (g,w,\lambda)) = 0$$

及心ノ

 $|(\xi_{c}^{+}(s,w,\lambda), \Upsilon_{c}^{+}(s,w,\lambda)) - (\pm \sqrt{\lambda} \omega/|w|,\pm|w|/2\sqrt{\lambda})| < C_{p}^{ME1}$ を任意の $(s,w,\lambda) \in (-s_{o},p_{o}) \times U$ に対してみたすものの一意的存在が示される。ここで、 f_{o} は適当な正数、U は $S^{N-1} \times K$ の $(R^{N}-10^{1}) \times R^{1}$ に含まれる開近傍、C > 0 は $(s,w,\lambda) \in (-p_{o},p_{o}) \times U$ によらない定数である。これより、関数

(髪(r,w,λ), $te(r,w,\lambda)$) = (髪 $t(r^{y},w,\lambda)$) を定義すると($te(r^{y},w,\lambda)$) は命題の条件をみたす唯一つのけ関数である。これかでかってあることは陰関数定理よりわかる。

(証明發)

この関数Y^tに対し、次の定理が成り立つ。

- i) 0<ξ₁<ξ₀ なる任意のξ₁に対し、正定数Cかあ、て、 任意のλ ∈ K、|x|> R'、|α|≤3に対し、
- $|(3\tilde{\chi})^{\pm}|(\chi;\lambda)| \leq C \gamma^{|-|\alpha|-\epsilon_1}$ $|(3\tilde{\chi})^{\pm}|(\chi;\lambda)| \leq C \gamma^{|-|\alpha|-\epsilon_1}$
 - 初 任意の Y>R', ω ∈ SN-1, λ ∈ K に対し,
- (2,7) ±2√x (∂rY±) (rω;λ)=V(rω)+|(∂xY±)(rω;λ)|²。 証明、定義より、

 $Y^{\pm}(Y\omega;\lambda) = \pm \sqrt{\lambda} \ \Upsilon - \Upsilon < \omega, \xi \in (\Upsilon, \omega, \lambda) >$ $- \Upsilon t \in (\Upsilon, \omega, \lambda) (\lambda - |\xi \in (\Upsilon, \omega, \lambda)|^{2})$ $+ \chi (\xi \in (\Upsilon, \omega, \lambda), \Upsilon t \in (\Upsilon, \omega, \lambda))$

である。一般に、関数 q(Y,w)=q(Yw)に称し、

(2.8) (2.8) $(2xg)(r\omega) = \omega(2rg)(r,\omega) + r'(2\pi g)(r,\omega) - (2\pi g)(r,\omega),\omega$ であることを使えば、

$$\begin{cases} (\partial_{\gamma} \Upsilon^{\pm})(\Upsilon \omega; \lambda) = \pm J \overline{\lambda} - \langle \omega, \xi \pm (\Upsilon, \omega, \lambda) \rangle \\ (\partial_{\omega} \Upsilon^{\pm})(\Upsilon \omega; \lambda) = -\Upsilon \xi \pm (\Upsilon, \omega, \lambda) \end{cases}$$

より,

$$(\partial x \Upsilon^{\pm})(r\omega; \lambda) = \pm \sqrt{\lambda} \omega - \xi_{c}^{\pm}(r, \omega, \lambda)$$

が得られる。これらと,(2.2),(1,4)より ii)はα易に示される。)は(2.8) を用いて QXY[±]を計算し,(2.2)を YWについて適 当な回数微分して得られる評価(このヒき,系 1,3 を用いる) を使えば証明できる。
(証明終)

さて、Hyに対する leigenoperator 紫(1) を構成するか、そのために、

$$(2.9)$$
 $H_3 = H_1 + V$

とおく. すると,

$$(2.10)$$
 $H_2 = H_3 + V_S$

である.

定義2.5. $\lambda > 0$, $\omega \in S^{N-1}$, $Y > R_{\lambda}(> 0)$ に対し,

(2,11)
$$\begin{cases} \theta_1^{\pm}(r,\omega,\lambda) = \mp \sqrt{\lambda} \Upsilon, \\ \theta_3^{\pm}(r,\omega,\lambda) = \mp \sqrt{\lambda} \Upsilon + \Upsilon^{\pm}(r\omega,\lambda) \end{cases}$$

とあく、但し、正数 R_Aは λか(0,∞) の compact 集合を動く とき, 有界にとどまる。

さて,本節の主定理(定理2.7)を述べるために沈部見生, 斉藤義実両氏[3]による一結果を述べよう。 定理2.6 (極限吸収原理). 仮定1.1 が $K_0 = 4$ としてみた されるとする。 Kを $(0,\infty)$ に含まれる compact 集合とし、 K^t = $\{z \in \mathbb{C} \mid \text{Mz} \geq 0, \text{Re}z \in K\}$ とかく。 j = 1, 2, xは、3とし、 $R_{j'}(z) = (H_{j'} - z)^{-1}$ とする。 また $\gamma > 1/2$ とする。 このとま、写像 $K^{\pm}X \stackrel{?}{L_{\gamma}}(R^N) \ni (z, x) \longmapsto R_{j'}(z) x \in L_{-\gamma}^{2}(R^N)$

は,連続な写像

 $K^{\pm} \times L_{\gamma}^{2}(\mathbb{R}^{N}) \longrightarrow L_{-\gamma}^{2}(\mathbb{R}^{N})$

に一意的に拡張され,

pup || Rj, (≥) || B (L3(RN), L27(RN)) < ∞

をみたす:ここでB(X,Y)は)ルム空間光からBanach空間Y への有界作用素全体のなすBanach空間を表わす。また、 $L^2_{\gamma}(R^N)$ $= L^2(R^N, (1+|x|)^{2} dx)$ でする。

i) 住意の $\lambda > 0$, $g \in L_{\ell}^{2}(R^{N})$ に対し、正数引 $\{\gamma_{k}\}$ ご $\gamma_{k} \to \infty$ ($k \to \infty$), δu^{i} , $\delta t \to \infty$ 時、 $\delta t = L^{2}(S^{N-1})$ にあいて、(2.12) $\gamma_{k}^{(N-1)/2}[(\partial/\partial Y - (\pm i\sqrt{\lambda}))(R_{Y}(\lambda \pm i'0)g)](\gamma_{k}) \to 0$

をみたすものか存在する。

ii) 任意の $\lambda > 0$, $g \in L_{\delta}(R^N)$ に対し、 $f_{K_1}^{\prime}$ を (2.12) きみたす正数列とすると、 $g = L^2(S^{N-1})$ にかいて、極限 (2.13) $\lim_{k \to \infty} \Upsilon_k^{(N-1)/2} e^{\frac{1}{10} \int_{\delta}^{\delta} (\Upsilon_k, \cdot, \lambda)} (R_{\gamma}(\lambda \pm i^{10})g)(\Upsilon_k \cdot)$ か存在し、(2.12) きみたす $\{\Upsilon_k\}_0$ とり λ にようない。

(者薩氏は [11] で、1>32-8。(>12) として上記定理を証明した。(但し、ののとり方は我々のものとは異なる。) 斉藤氏はこれか 1>12 でも成立することを [11],[12] の 結果を用いて証明した。)

せて、次の定義ができる.

定義 2.8. 1>1/2, $\lambda>0$, $g\in L_{7}^{2}(R^{M})$ とする。1/2, 1<2) をみたす任意の正数 3) ヒするとま、1=1, 1=1,

このとき、次の命題が成り立つ([12]のProposition 3.6を参照).

 に対してみたす。

§ 3. Stationary mare operator の構成と完全性.

本節では、いわゆる xtationary (time-independent) wave operator を構成し、その完全性を証明する. Time-dependent wave operator との関係は父節で扱う。

定義3.1. $u \in \mathcal{H} = L^2(\mathbb{R}^N)$, $z \in \mathbb{C}^{\pm} = \{z \mid z \in \mathbb{C}, \{mz \geq 0\}\}$ に対し、

(3.1) $S^{\pm}(z)u = \pm i \int_{-\infty}^{\infty} \chi_{\pm}(t) e^{i\chi(t)} e^{i\chi(t)}$

まて、明らかに $S^{\pm}(E) \in B(H)$ でするかり、せらに、 $u \in D(H_1)$ のと主は、 $S^{\pm}(E)u \in D(H_1) = D(H_2)$ か容易に示される。後、て次の定義ができる。

<u>定義3.2.</u> $n \in \mathcal{D}(H_1)$, $z \in \mathbb{C}^{\pm}$ に対し, $G^{\pm}(z)u = (H_2 - z) S^{\pm}(z)u,$ $Q^{\pm}(z)u = G^{\pm}(z)u - u.$

補題3,3. 仮定1,1 かん=4 としてみたされるとする。このとま、 $u \in \mathcal{D} = \mathcal{F}^{-1}(C_o^{\infty}(R^N-10)))$ $C\mathcal{D}(H_1)$, $z \in \mathbb{C}^{\pm}$ ならば,

$$\begin{split} &\mp \iota'(z\pi)^{N/2}(Q^{\pm}(z)u)(\chi)\\ (3,3) &= \mathcal{J}(\chi)\int\limits_{-\infty}^{\infty}\int\limits_{\mathbb{R}^{N}}\chi_{\pm}(t)e^{\iota'(\chi_{\lambda}\xi)+\iota't(z-|\xi|^{2})-\iota'\chi(\xi,t)}\hat{\Omega}(\xi)\,d\xi\,dt\\ &-\int\limits_{-\infty}^{\infty}\int\limits_{\mathbb{R}^{N}}\chi_{\pm}(t)e^{\iota'(\chi_{\lambda}\xi)+\iota't(z-|\xi|^{2})-\iota'\chi(\xi,t)}\\ &-\int\limits_{-\infty}^{\infty}\int\limits_{\mathbb{R}^{N}}\chi_{\pm}(t)e^{\iota'(\chi_{\lambda}\xi)+\iota't(z-|\xi|^{2})-\iota'\chi(\xi,t)}\\ &+i'\xi\chi\,\,|\,\,\dot{\Sigma}\,\,\mathcal{I}. \end{split}$$

<u>記明</u>. 部分積分と Fourier 変換により容易. (証明終) $Q^{\pm}(\lambda\pm\sqrt{\epsilon})u(\lambda>0,\epsilon>0,u\in\mathcal{D})$ $g\in \to +0$ の時の境界値を考えるために次の定理を準備する。

<u>定理3.4.</u> 仮定1.1 か Ko=[(N+7)/Eo] としてみたされると する. C[∞] 関数 v(§,t) ∈ C[∞](R^NXR¹) か次をみたすとする.

v1) $0 < a_1 < a_2 < \infty$ なる おる正数 a_1 , a_2 になし、 supp $v(\cdot,t)$ $c < \{\xi \mid a_1 < |\xi| < a_2\}$, $t \in \mathbb{R}^1$.

このとき、さらば、XFRN になし、

(3.5)
$$A^{\pm}(z, v; x)$$

= $\int_{\mathbb{R}^{N}} \int_{\mathbb{R}^{I}} x_{\pm}(t) e^{\lambda(x, \xi) + \lambda(\xi - |\xi|^{2}) - \lambda(\xi, t)} v(\xi, t) dt d\xi$

- り 住意の ϵ >oに対し、正定数Cがあって、任意の λ 、 λ $\in \mathbb{R}^1$ 、 α , $\alpha' \in \mathbb{R}^N$ に対し、
- (3.6) $|A^{\pm}(\lambda \pm i' \epsilon, \nu; x) A^{\pm}(\lambda' \pm i' \epsilon, \nu; x')| \leq C \left(|x x'| + |\lambda \lambda'|\right)$

か成り丘つ.

- i) 任意の λ ∈ R¹, X ∈ R^N に対し、極限
- (3.7) $A^{\pm}(\lambda \pm i'0, v; x) = \lim_{\epsilon \to +0} A^{\pm}(\lambda \pm i'\epsilon, v; x)$ か存在する。
 - 彻 正定数 R,C かあ, て次か成り立つ.
 - a) 任意 $\lambda \in \mathbb{R}^1 K$, $\epsilon \geq 0$, $x \in \mathbb{R}^N$ に対し,
- (3.8) $|A^{\pm}(\lambda \pm i \cdot \epsilon, \nu; x)| \leq C (1+|x|)^{-(N-1)/2-2} (1+|\lambda|)^{-1}$
 - b) 任意のスモK, E≥0, |X|≤Rに対し,
- $(3.9) |A^{\pm}(\lambda \pm i \cdot \epsilon, \upsilon; x)| \leq C.$
 - c) 任意の $\lambda \in K$, $\epsilon > 0$, $\gamma > R$, $\omega \in S^{N-1}$ に対し、 $A^{\pm}(\lambda \pm i)^{\epsilon}, \nu$; $\gamma \omega$)
- (3,10) $\frac{(2\pi)^{(N+1)/2}}{(2\pi)^{(N+1)/2}} e^{\mp \pi \tau'(N+1)/4} e^{\mp \epsilon r t \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda)} r^{-(N-1)/2}$ $\times e^{\tau r \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda)} \frac{1}{\epsilon} \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda), t \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda)} \tau \left(\frac{1}{\epsilon} \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda), r \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda)\right) \right|^{-1/2}$ $\times \left| \det J(r,w,\lambda), \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda), t \frac{1}{\epsilon}(r,w,\lambda)\right|^{-1/2}$

≤C r-(N-1)/2-1-h

但レ、 f,J, をき,tきは命題 2,2のもの。

この定理は stationary phase method を用いて証明されるか。 かなり長くなるので証明は割愛する。

補題3,3 より , @は)いは (3.5)を用いて ,

(Q±(2)u)(x)

(3.11) $= \pm i (2\pi)^{N/2} \left\{ U(x)A^{\pm}(z,\Omega;x) - A^{\pm}(z,(\partial_t X)(\cdot,t)\Omega(\cdot);x) \right\}$ と書けるから、定理3.4より次をうる。

1) 任意の正数とに称し、正定数さかす。て、任意のス、 $\chi' \in \mathbb{R}^1$ 、 $\chi, \chi' \in \mathbb{R}^N$ に対し、

 $|(Q^{\pm}(\lambda \pm \iota' E)u)(x) - (Q^{\pm}(X \pm \iota' E)u)(x')| \le C(|\lambda - \lambda'| + |x - x'|).$

i) 任意のλ ∈ R¹, x ∈ R^N に対し,極限

 $(Q^{\pm}(\lambda)u)(\lambda) \equiv \lim_{\epsilon \to +0} (Q^{\pm}(\lambda \pm i'\epsilon)u)(\lambda)$

か存在する.

iii) ある正定数 Cかあって,任意の $\epsilon \geq 0$, $\lambda \in \mathbb{R}^1$, $\chi \in \mathbb{R}^N$ に対じて,

 $|(Q^{\pm}(\lambda \pm \sqrt{\epsilon})u)(\alpha)| \le C(1+|\alpha|)^{-(N-1)/2-1-\epsilon_0}(1+|\alpha|)^{-1}$

証明. り, 削は定理3,4,(3,11)より明らか. 削は定理3,4,(3,11),8 ルッ、関係す

(3.12) $V(Yw) = (\partial_t X)(\S^{\pm}(Y, w, \lambda), Yt^{\pm}(Y, w, \lambda))$

(十分大なるかに称して成り立つ)を使って導かれる。((3. 12) は (2,2), (1,4)よりえるれる。) (証明終)

これより、次の定理がいえた.

(3.13) $Q^{\pm}(\lambda) U = \lim_{\epsilon \to +\infty} Q^{\pm}(\lambda \pm \iota' \epsilon) U$

から(RM) において存在する。 さらに,任意のE>Oに対し, Q±(ス±v'E)u ∈ ら(R*); しま(RN)) ご,極限

(3.14) |.i',m. Q±(λ±ι'ε) μ ε→+0

から(R2)にな(RM)) にあいて存在する...

定理3.4を使之ば、さらに次のことが証明できる。

 $\overline{\mathcal{D}}$ 理 3.7. 仮定 1.1 が $k_0 = [(N+7)/\epsilon_0] としてみたせれるとする. このとき、任意の<math>\lambda > 0$ 、 $u \in \mathcal{D}$ に対し、 $y = L^2(S^{N-1})$ において、

(3.15) 第 $^{t}(\lambda)G^{t}(\lambda)u=$ 第 $^{t}(\lambda)u=$ 2 $^{-N/2}\lambda^{(N-2)/4}e^{\mp\pi\iota'(N-1)/4}\Omega(t_{\sqrt{\lambda}}\omega)$ が成り立つ、但し、第 $^{t}(\lambda)$ は定義2,8 z^{*} 、 $\gamma = S(1/2 \times S < 1/2 + \epsilon_{\circ})$ としたもの、また、 $G^{t}(\lambda)u=u+Q^{t}(\lambda)u$.

<u>証明</u>, 定理 3, 4, 2, 6, 2,7 と命題 2, 2の評価 (2,3) を 使えばできる。 (証明終) きて、xtationary wave operator を構成するため少し準備をしよう. (以下の定義は加藤敏夫,黒田成後西氏[5],[6]に負う.)

以下 \int は 1/2 く σ く 1/2 + ϵ 0 と と 、 て 固定する . $\mathcal{H} = \mathcal{L}$ と π きん \mathcal{H} と π たん π に π の π の π の π か π か π の π か π に π し π の π

(3,16) $e_y(\lambda;x,y) = (\{R_y(\lambda+i0)x-R_y(\lambda-i0)x\},y)_{\mathcal{H}}/2\pi i$ が定義できる. 容易に示されるように、これは次の3条件をみたす. 但し、アは下 $C(0,\infty)$ なる有界 Borel 集合.

1° 任意の $x,y \in \mathcal{X}$ に対し、 $e_{i}(\cdot;x,y) \in L^{1}(\Gamma)$. せらに、任意の Γ のBord 集合 Δ に対し、

(3,17) $\int_{\Delta} e_{j}(\lambda)x,y) d\lambda = (E_{j},ac(\Delta)x,y)_{ye}.$

2° 任意の入を下に対し、といい、りは 我X我, 上の非身 Hermite 形式である。

3° 正定数 C があ、 C ,任意の $\lambda \in \Gamma$, χ , $\gamma \in \mathcal{X}_{j}$ に対し, (3.18) $|e_{j'}(\lambda;\chi,y)| \leq C \|\chi\|_{\mathcal{X}_{j}} \|y\|_{\mathcal{X}_{j}}$ 。 $t \in \mathcal{X}_{j'} |e_{j'}(\lambda;\chi,\chi) = 0$ とし, $\mathcal{X}_{j'}(\lambda) = \mathcal{X}_{j'}/\mathcal{Y}_{j'}(\lambda)$ とかくと, $\mathcal{X}_{j'}(\lambda)$ は $e_{j'}(\lambda)$, $\mathcal{X}_{j'}(\lambda)$ の $\mathcal{X}_{j'}(\lambda)$ で表わし, その内積,, ι 、 ι

= $\chi_{j}(\lambda)$ ヒなる。 $\chi_{j} = \chi_{j}(\lambda)$ (直積) とかく。 Γ から我への単関数全体のなす線型空間を J_{j} で表わす。 $g \in \chi_{j}$ が ψ_{j} 一可測であるとは、単関数の引んが CJ_{j} があって、殆んど至るヒころの $\lambda \in \Gamma$ に対し、

fim $||g(\lambda) - J_{y}(\lambda) h_{n}(\lambda)||_{y,\lambda} = 0$ が成り立っことをいう、今,

(3,19) が、={gモデ、| gはと、一可望して、

 $\|g\|_{m_{\mu}} = \left[\int_{\Gamma} \|g(\lambda)\|_{L^{2}(\lambda)}^{2} d\lambda\right]^{1/2} < \infty$

命題3.8. 仮定1.1 がん=4としてみたまれるとする。このとき、ユニタリ作用素で、 $H_{j,\infty}(P) \rightarrow m_{j'}$ か存在して次をみたす。

- a) 任意の中の Borel 集合人, 及心, $n \in \mathcal{H}_{j,ac}(P)$ に対し、 $\pi_{j}^{*}E_{j,ac}(\Delta) n = \{\chi_{o}(\lambda)(\pi_{j}^{*}u)(\lambda)\}_{\lambda \in P}$.
- り 任意の $X \in \mathcal{X}$ に対し、 Ty Ej,ac(Γ) $X = \{J_y(\lambda)X\}_{\lambda \in \Gamma}$. 但し、 Hj,ac(Γ) = Ej,ac(Γ) 代.

さて, 本節の主定理を証明しよう.

9m1→9m2が唯一つ存在する.

- a) 住意の下のBool 集合 Δ , 及u'', $u \in \mathfrak{M}_1$ に対し、 (3.20) $\hat{G}^{\pm}(\chi_{\Delta}(\lambda)u(\lambda))_{\lambda \in \Gamma} = \{\chi_{\Delta}(\lambda)(\hat{G}^{\pm}u)(\lambda)\}_{\lambda \in \Gamma}$.
- b) 任意のエモ私に対し,

(3.21)
$$\widehat{G}^{\pm} \{J_1(\lambda) \mathcal{I}\}_{\lambda \in \Gamma} = \{J_2(\lambda) G^{\pm}(\lambda) \mathcal{I}\}_{\lambda \in \Gamma}.$$

(但し、G=(N)は定理3.7で定義したもの.)

この食がによって、

(3.22)
$$W_{\Gamma}^{\pm} = \begin{cases} \pi_{2}^{-1} \hat{G}^{\pm} \pi_{1} & : \mathcal{H}_{1,ac}(\Gamma) \perp, \\ 0 & : \mathcal{H} \ominus \mathcal{H}_{1,ac}(\Gamma) \perp \end{cases}$$

と定義すると、W市は始集合代1,ac(P)、終集合代2,ac(P)なる 出における部分等距離作用素となり、次の2条件をみたす。

i) 任意のBorel 集合 D C R1 に対し,

(3,23)
$$W_{P}^{\pm} E_{1}(0) = E_{2}(0) W_{P}^{\pm}$$
.

的 住意のx ∈ X1, y ∈ X2, & W, Borel 集合△1,△2 ⊂ Pに対し、

(3,24)
$$(W_p^{\pm}E_{1,ac}(\Delta_1)\chi, E_{2,ac}(\Delta_2)\gamma)_{\mathcal{H}} = \int_{\Delta_1 \Lambda \Delta_2} e_2(\lambda) G^{\pm}(\lambda)\chi_{\mathcal{H}} d\lambda.$$

証明、G^tの存在がいえれば、かがはみが、命題3.8より容易に示される。まためがしまみたすG^tの一意性も容易であるので存在のみを証明する。

我心か我ので調密なこと、及心、命題2.9より、任意の入

 ϵ じ、 $x \in X_1$ に対し、 $\mathfrak{P}_{r}^{+}(\lambda)x = F_{r}^{+}(\lambda)J_{r}(\lambda)x$ をみたす等距離 作用素をかい、美い一分=12(5~1)の存在かりえる。せらに 定理3.7より、Ft/x)はユニタリとなり、後、て、同じく定理 3.7よりたりかもユニタリとなる、ゆシに、合かの三ため、計し は $\widetilde{\mathcal{X}}_{1}(\lambda) \to \widetilde{\mathcal{X}}_{2}(\lambda)$ なるユニタリ作用素となる。今,任意のタ EJ121 に対し、G+9=1G+(x)9/1)り10アと定義する、する と $x \in \mathcal{X}_1$ のとま、 G[±] $J_1 x = \{G^{\pm}(\lambda)J_1(\lambda)x\}_{\lambda \in \Gamma} = \{F^{\pm}(\lambda)^* \mathcal{F}_1^{\pm}(\lambda)x\}_{\lambda \in \Gamma}$ = {F=(A)* == (A) G=(A) x } = {J_2(A) G=(A) x } = T = 3 D 5, G^t(λ)χ かλ ← Γ にっき 強可測(定理3,6 多照) なことと, Δ(λ) が有界 なことより、 Gt y e M2 かいえる。 せるに Gt(1) はユ ニタりゆえ、Gt はMyからMz への等距離作用表に拡張さ れる。 \hat{G}^{\pm} かのなですることをいあう。それには、 $v \in \mathfrak{M}_2$ か任意の 9 € J1 &1 になし、(今9, ひ)っか。= 0 をみたすなら、 ひ=0 であることをいえばよい、なり。 を我の稠密な可算 集合とすると、仮定より、任意のた、Boul集合OCPになし、 (G+J, 20元, ひ)から一〇か成り丘つ、書き換えれば、

 $\int_{\Delta} \left(\widehat{G}^{\pm}(\lambda) J_1(\lambda) X_{k}, v(\lambda) \right)_{2,\lambda} d\lambda = 0.$

△は任意、且、似けは可算ゆえ、アのある Bonel 集合Aて、アーAの測度がの、且、任意の $\lambda \in A$ に対し、($G^{\pm}(\lambda)$ $J_{1}(\lambda)$ λ_{k} , $v(\lambda)$) $_{2,\lambda}=0$ なるものかある、 $G^{\pm}(\lambda)$ はユニタリ、また、 $\{J_{1}(\lambda)\lambda_{k}\}_{k=1}^{\infty}$ は光 $\{\lambda\}$ で稠密であるから、これより、任意の λ

 ϵ A に対し、 $v(\lambda)=0$ がえられる。後,こ、 m_2 において、v=0。 よ,て G^\pm は $m_1 \to m_2$ 左るユータリ作用表でおる。 G^\pm かのをみたすことは 定義より 明らか。 りをみたすことは すでに上で示した。 (証明終)

多4. Time dependent mare operator との関係、及か, Imanance principle (定理1.5,1,6の記明).

本節では、前節の定理3.9で構成した stationary mare operator W声と、time dependent mare operator W声との関係を考察する。また、Invariance principleにコルても簡単に触れる。

定義4.1. 任意のマ $\in \mathbb{C}^{\pm}$, $u \in \mathcal{H} = L^{2}(\mathbb{R}^{N})$, $v \in \mathcal{D}(H_{I})$ に対し、

(4.1)
$$\begin{aligned}
\tau^{\pm}(z) u &= (S^{\pm}(z) - S^{\mp}(\overline{z})) u / 2\pi i, \\
D^{\pm}(z) v &= (G^{\pm}(z) - G^{\mp}(\overline{z})) v / 2\pi i \\
&= (Q^{\pm}(z) - Q^{\mp}(\overline{z})) v / 2\pi i, \\
\delta_{2}(z) u &= \text{Agn}(Im \overline{z}) (R_{2}(z) - R_{2}(\overline{z})) u / 2\pi i.
\end{aligned}$$

次のことは容易にわかる.

補題4.2. 仮定1.1か $K_0=4$ としてみたされるとする。 ϵ \mathbb{C}^{\pm} , $u \in \mathcal{D}(H_1)$ に対し ,

(4.2) $C^{\pm}(z)u = \pm \delta_{2}(z)G^{\pm}(z)u + R_{2}(\overline{z})D^{\pm}(z)u$.

補題4.3、仮定1.1か"Ko=4としてみたされるとする。こ

のとき、 $\mathcal{X}=L^2_{\sigma}(R^N)$ にあかる非負自己共役有界作用素 $K_{\sigma}(\lambda)$ 、 $\lambda\in \Gamma$ 、か存在して次をみたす。

- i) 任意のy ∈ 光に対し、 Kz(·)y: 「→光」は強連続。
- ii) 任意のさ、y ∈ 光2, 入 ∈ ア に対し、 ピ2(ス)を,y)=(K2/λ)を,y)_{大3}=(を,K2/λ)y)_{大3}.
- iii) sup || K2(x) || B(x2) < 0.

さて、我もの key point となる命題を証明しよう。

承題4.4. 仮定1.1 かド $k_0=[(N+7)/\epsilon_0]$ としてみたまれるとする。 $\forall x \text{ supp} x \in \Gamma$ たる R^1 上の有界可測関数とする。このとま,任意の $x \in X_1 = \mathcal{D}$, $y \in X_2 = L^2(R^N)$, $\epsilon > 0$ に対して,(4.3) $(\tau^{\pm}(\lambda \pm i'\epsilon)x, x (H_2,ac)y)_{4p} \in L^1(R^1_\lambda)$.

さらに、中ELORYとすると、次式中の極限が存在して、

$$(4.4) \qquad \mp \int_{\mathbb{P}} \overline{\Psi(\lambda)} \overline{\alpha(\lambda)} \, \, \boldsymbol{\varepsilon}_{2}(\lambda) \, \boldsymbol{G}^{\pm}(\lambda) \boldsymbol{x}_{2} \boldsymbol{y}_{2}) \, d\lambda \, \Big|^{2}$$

$$\leq C(\boldsymbol{x}_{2}) \, \|\boldsymbol{\Psi}\|_{\underline{\mathcal{P}}(\mathbb{R}^{1})}^{2} \, \int_{0}^{\infty} \left\| \int_{\mathbb{P}} \alpha(\lambda) \, \boldsymbol{\varepsilon}^{\mp i ! \lambda \lambda} K_{2}(\lambda) \boldsymbol{y}_{2} \, d\lambda \, \right\|_{\mathcal{X}_{2}}^{2} d\lambda$$

か成り 乞う、但し、 C(x) は xのみによる正定数。

証明. 今,

$$\int A_{1,\varepsilon}^{\pm}(\lambda) = e_2(\lambda \pm i \varepsilon; \chi, \alpha(H_2,ac) y),$$

$$(4.5) \begin{cases} A_{2,\epsilon}^{\pm}(\lambda) = \mathcal{E}_{2}(\lambda \pm i'\epsilon) \otimes \mathcal{A}, & \alpha(H_{2,ac}) \mathcal{Y}, \\ A_{3,\epsilon}^{\pm}(\lambda) = (D^{\pm}(\lambda \pm i'\epsilon) \times, R_{2}(\lambda \pm i'\epsilon) \otimes (H_{2,ac}) \mathcal{Y})_{\mathcal{H}} \end{cases}$$

とかく、但し、 さらでも、 い、ひられに対し、 ヒュ(を) い、ひ) = (ら(を) い、ひ)れ・

すると、補題も2より、

$$(\tau^{\pm}(\lambda^{\pm}\iota'^{\epsilon})\chi,\alpha(H_{2,ac})y)ye$$

$$= \pm A_{1,\epsilon}^{\pm}(\lambda) \pm A_{2,\epsilon}^{\pm}(\lambda) + A_{3,\epsilon}^{\pm}(\lambda)$$

かえられる。

まず、Ateを考えよう。これは、

(4.7) $A_{1,\epsilon}^{\pm}(\lambda) = \frac{\epsilon}{\pi} \int_{-\infty}^{\infty} \frac{1}{(\lambda-\mu)^{2}+\epsilon^{2}} \overline{\alpha(\mu)} \, e_{2}(\mu; x, y) \, d\mu$ と書けるから、Poisson 積分の性質より、L¹(R¹) において極限 $\lim_{\epsilon \to +\infty} A_{1,\epsilon}^{\pm}$ が存在して、

(4.8) \(\alpha(\lambda)\) \(\mathbb{e}_2(\lambda)\times\lambda,\gamma)

た等しい.

次に, Ate を考える.これは,

(4.9) At, $\epsilon(\lambda) = (Q^{\pm}(\lambda \pm i'\epsilon) \times , \mathcal{L}(\lambda) \vee (H_{2,ac}) \vee \mathcal{L})$ と書ける。但し、 $\mathcal{L}(\lambda)$ は $\mathcal{L}(\lambda \pm i'\epsilon)$ の 境界値を表わす。定理3.6 より、 $L^{2}(R_{\lambda}^{1})$ 上 $\mathcal{L}_{\lambda}^{2}(R^{N})$ において、 $\mathcal{L}_{\lambda}^{1}$ において、 $\mathcal{L}_{\lambda}^{2}$ が存在する。また定理2.6 と Lawine 氏[9] の 結果を用いれば、 $\mathcal{L}_{\lambda}^{2}$ によいこ、極限 $\mathcal{L}_{\lambda}^{2}$ にかいこる。後、て、 $\mathcal{L}_{\lambda}^{2}$ において、 $\mathcal{L}_{\lambda}^{2}$ が存在する。

る. ゆえに,

 $\lim_{\epsilon \to +0} \int_{-\infty}^{\infty} \Psi(\lambda) A_{2,\epsilon}^{\pm}(\lambda) d\lambda = \left(\int_{\Gamma} + \int_{R^{\perp}\Gamma}\right) \Psi(\lambda) \lim_{\epsilon \to +0} A_{2,\epsilon}^{\pm}(\lambda) d\lambda$ が得られるが、これの右辺第2項はのに等しいことが、

lim de (λ± ι'Em) α (Hz,ac) y = 0, a.e. λ∈ Γ m→∞

よりいえる。但し、{Em} は Em→+0 (m→∞) なる適当な正

数列.また,同様の正数別(Em)をとると,a.e.xeアに対し,

lin ez(xti'Em; Q±1xti'Em)x, &(Hz,ac)y)

= \(\overline{\alpha(\lambda)} \) \(\epsi_2(\lambda) \overline{\alpha}(\lambda) \overline{\alpha}(\lambda) \overline{\alpha}, \(\gamma\rangle)\)

か"成り立つことかいえる。これらより,

(4.10) $\lim_{\epsilon \to +0} \int_{-\infty}^{\infty} \Psi(\lambda) A_{2,\epsilon}^{\pm}(\lambda) d\lambda = \int_{\Gamma} \Psi(\lambda) \overline{\alpha(\lambda)} \, e_{2}(\lambda) Q^{\pm}(\lambda) x, y) d\lambda$ が得られる。

最後に, At を考えよう。これは,

(4.11) $A_{3,\epsilon}^{\pm}(\lambda) = \int_{\Gamma} \frac{1}{\mu - (\lambda \mp i\epsilon)} \overline{\alpha(\mu)} e_2(\mu; D^{\pm}(\lambda \pm i\epsilon) x, y) d\mu$ と書ける、補題4.3 を使えば、これは、

 $(D^{\pm}(\lambda \pm i \epsilon) x, h^{\pm}(\lambda \pm i \epsilon))_{*}$

に拏しいことがいえる。但し,

$$h^{\pm}(\lambda \pm i \xi) = \int_{\Gamma} \frac{1}{M - (\lambda \pm i \xi)} d(\mu) K_2(\mu) y d\mu$$

は $\mathcal{X}_{z} = L_{x}^{2}(R^{N})$ に かける 積分で する。 補題 4.3 , 及 α'' , $\alpha h''$ 有界 な ことを用 いれば , λ_{z}^{1} , λ_{z}^{+} (λ_{z}^{+}) に λ_{z}^{+} (λ_{z}^{+}) に λ_{z}^{+} で かって 存在する ことが示される。 他 方, 定理 3.6 より ,

|.i.m. D*(x±iE) x が じ(R1)しな(RN)) において存在すること モコ+0

$$\int_{-\infty}^{\infty} \left\| \int_{-\infty}^{\infty} \int_{0}^{\infty} \left\| \int_{\Gamma} \alpha(\lambda) e^{\mp i n \lambda} K_{2}(\lambda) y d\lambda \right\|_{\mathcal{X}_{2}}^{2} ds$$

$$= 2\pi \int_{0}^{\infty} \left\| \int_{\Gamma} \alpha(\lambda) e^{\mp i n \lambda} K_{2}(\lambda) y d\lambda \right\|_{\mathcal{X}_{2}}^{2} ds$$

かいえる.以上より,

$$\left| \lim_{\varepsilon \to +0} \int_{-\infty}^{\infty} \Psi(\lambda) A_{3,\varepsilon}^{\pm}(\lambda) d\lambda \right|^{2}$$

$$\leq C(x) \|\Psi\|_{L^{\infty}(\mathbb{R}^{1})}^{2} \int_{0}^{\infty} \left\| \int_{\Gamma} \alpha(\lambda) e^{\pm i n \lambda} K_{2}(\lambda) y d\lambda \right\|_{\mathcal{X}_{2}}^{2} dx$$

か得られる.但し,

$$C(x) = 2\pi \int_{-\infty}^{\infty} \| || \ln m \cdot D^{\pm}(\lambda \pm i \cdot \varepsilon) x \|_{\mathcal{X}_{2}}^{2} d\lambda.$$

・以上(4.8),(4.10),(4.12)と(4.6),(4.5)より,(4.3),(4.4)がりえる.

(証明終)

せて定理1.5を証明しよう、命題4.4にあいて、 $\Psi(\lambda)=E^{it\lambda}$ 、 $\alpha(\lambda)=E^{-it\lambda}\chi_{\Delta}(\lambda)$ とおく、但し、 Δ は「の任意のBoral 集合、すると、(4.4) より、

$$(4.13) \qquad \mp \int_{\Delta} \mathbb{E}_{2}(\lambda) G^{\pm}(\lambda) x_{2} y_{3} d\lambda \Big|^{2}$$

$$\leq C(x) \int_{0}^{\infty} \left\| \int_{\Gamma} \chi_{\Delta}(\lambda) \mathbb{E}^{-\sqrt{1}} \lambda \mp \sqrt{2} \lambda \lambda \left\| \chi_{2}(\lambda) y_{3} d\lambda \right\|_{\mathcal{X}_{2}}^{2} dx$$

がえられる。定理3.9より、左辺11内第2項は、 $\mp(W=x,E_{2,ac}(\Delta)y)_{ye}$ に等しい。また第1項は、Founder変換を使って、 $\pm(W_D(t)x,E_{2,ac}(\Delta)y)_{ye}$ に等しいことがいえる。但し、 $W_D(t)=e^{itH_2}e^{-itH_1-i\chi(t)}$. 他方、(4.13)の右辺は、 $t\to\pm\infty$ の時のに収束するから次を得る:任意の $\chi\in\chi_1,y\in\chi_2$ 、Founder というとなった好し、

 $\lim_{t\to \pm\infty} ((W_D(t)-W_{\bar{r}})x, F_{2,ac}(\Delta)y)_{\mathcal{H}} = 0.$ これと、 $e^{-\sqrt{\lambda}DH_2}x(x\in\mathcal{X}_1,\lambda\in R^1)$ が光の基本集合をなすこと、及び、光にあいて $\lim_{t\to \pm\infty} e^{\sqrt{(X(t+\lambda)-X(t))}}u=u(\lambda\in R^1,u\in H)$ ですることを使えば、任意の $u\in H$ に対し極限 $\lim_{t\to \pm\infty} W_D(t)F_{1,ac}(P)u$ が光にあいて存在して、 $W_{\bar{r}}^{\bar{r}}u$ に等しいことがいえる。 $P = P = C(0,\infty)$ なる任意の有界 Bond 集合であ、たから、極限 (1.8)の存在、及び、 $R(W_{\bar{r}}^{\bar{r}})=H_{2,ac}$ かいえた。 (R(T))は 作用素下の値域を表わす。)

次に、Invariance principle について簡単に触れてあこう。ます。、次のことを証明をして認めよう、(詳細は[8] 易照、) <u>命題4.5</u>、仮定1.1 か $K_0=7$ としてみたされるとする。このとき、光、ac(P) から光への等距離作用素 $Q_g^{ao}(t)$ 、 $t \in R^1$ 、か 存在して、

(4.14) $\lim_{t\to\pm\infty} (Q_g^{ab}(t)u - Q_g(t)u) = 0$, $u \in \mathcal{H}_{1,ac}(\Gamma)$ $\xi \not > \xi \not = 1$.

せて、命題4.4にあいて、 $\Psi(\lambda)=e^{-itg(\lambda)}\eta(\lambda)$ 、 $\chi(\lambda)=e^{-itg(\lambda)}\eta(\lambda)$

 $\lim_{t\to\pm\infty} (W_9(t)x - W_7^2x, E_{2,ac}(\triangle)y)_{yl} = 0$ $\lim_{t\to\pm\infty} (W_9(t)x - W_7^2x, E_{2,ac}(\triangle)y)_{yl} = 0$ $\lim_{t\to\pm\infty} (W_9(t)x - W_9^2x, E_{2,ac}(\triangle)y)_{yl} = 0$

これと (4.14)を合わせて、定理1.6を得る。

参考文献

- [1] L. Hörmander, The existence of wave operators in scattering theory, Math. Z., 146(1976), 69 91.
- [2] T. Ikebe, Spectral representation for Schrödinger operators with long-range potentials, II, perturbation by short-range potentials, Publ. RIMS, Kyoto Univ., 11(1976), 551 558.
- [3] T. Ikebe and Y. Saitō, Limiting absorption method and absolutely continuity for Schrödinger operators, J. Math. Kyoto Univ., 12(1972), 513 542.
- [4] H. Isozaki, On the long-range stationary wave operator, (to appear).
- [5] T. Kato and S. T. Kuroda, The abstract theory of scattering, Rocky Mount. J. Math., 1(1971), 127 171.
- [6] , Theory of simple scattering and eigenfunction expansions, Functional Analysis and Related Fields, Springer-Verlag, Berlin, Heiderberg, and New York, 1970, 99 131.

- [7] H. Kitada, Scattering theory for Schrödinger operators with long-range potentials, I, abstract theory, (to appear).
- [8] , Scattering theory for Schrödinger operators with long-range potentials, II, spectral and scattering theory, (to appear).
- [9] R. Lavine, Absolute continuity of positive spectrum for Schrödinger operators with long-range potentials, J. Functional Analysis, 12(1973), 30 54.
- [10] G. Pinchuk, Abstract time-independent wave operator theory for long-range potentials, (preprint, 1975).
- [11] Y. Saito, On the asymptotic behavior of the solutions of the Schrödinger equation $(-\Delta + Q(y) k^2) = F$, (to appear).
- [12] , Eigenfunction expansions for the Schrödinger operators with long-range potentials $Q(y) = O(|y|^{-\epsilon})$, $\epsilon > 0$, (to appear).